劉少奇著『共産党員の修養を論ず』の延安原型

はじめに

筆者は一昨年，台北の青淳にある司法行政部調査局図書館において，延安時期の中共の文献を読む機会にめぐまれた。その際，劉少奇の多くの知られざる興味ぶかい論文に接することができたのである。そこで，1962年8月1日に劉少奇の『共産党員の修養を論ず』の改訂版が発表されたことに関連して，この論文の「原型」を，つまり延安時期に発表されているその全体の構成とその後の削除部分の部分的邦訳をここに紹介してみたい。

だが，それにはいる前に少し考えてみたいのは，1962年というこの年に，中共はなぜその内容を今日の中共の状況に適合するように若干の修正をほどこした上でふたたび発表したのであろうかということである。これについて，ボアマン(Howard L. Boorman)教授は「初版以来23年後に"How to be a good Communist"(『論共産党員的修養』の英訳)がふたたび現われたということは，毛沢東の後継者としての劉少奇の地位についての権威を確認したものである。と同時に，それが1962年にふたたび現われたということは，基本的な政治的諸原則をふたたび強調していることを象徴的に示していた」(注1)とのべている。では今日に至ってその"基本的諸原則"をふたたび強調しなければならないという現在の中共政権の背景とはどういうものであろうか，ここできわめて簡単にふれてみたい。

(注1) Howard L. Boorman, "How to be a Good Communist: the Political Ethics of Liu Shao-chi", *Asian Survey*, August 1963.

I

昨年わたくしは香港に滞在していたとき若干の中国難民（このタームは適切な表現とはいえないが）と多少本格的な"面接"をこころみたことがある。その中の1人に1年ほど前に広東から出国して来た元中共党員のワンさん（30歳）がいた。かれがなぜ中共から離脱するに至ったかについては，わたくしはあまり詳しくせんさくすることをしなかったけれども，かれが約10年に及ぶ党員としての広東省での生活体験を語るなかで明らかにしたところによると，1957年の"反右派闘争"がかれの中共のリーダーシップに対する"不信"の念を抱かせたはじまりであった。

周知のように"反右派闘争"は中共リーダーシップの変質にとってきわめて重要な転換点である。このとき，中共批判者に対する"闘争"の嵐は多くの善意の中共党員と知識分子をまきこみ，かれらをきびしい"改造"と"自己批判"の"法廷"に立たせることになったのである。反右派闘争の渦中で，中共の強大な政治的圧力の前に，これらの人々は"人民への投降"や"謝罪"をよぎなくされ，さまざまの処罰を甘んじて受けたけれども，その後の多くの徴候が示すようにこのとき以来，多くの善良な中国の"ganbu"(幹部)たちの意識の底には，中共の独裁的リーダーシップに対する"幻滅"と"恐怖"と"疎外感"が根深く潜在するようになってしまったようである。リーダーシップにおける循環の切断，末端における機能の"空洞化"という今日の中共の幹部問題の困難性は，この時期から新しい段階にはいるようになってきたとも見られるのである。

1957年春の整風運動に始まり，最近の社会主義教育運動に至るまで，この8年間に，中共党員は何回とはなく手をかえ品をかえて繰り返されるさまざまの整党，整風運動の関門を通らなければならなかった。元中共党員ワンさんは，これについて，今日の中共党員は"整風"の通過のしかたについては既に"老油条"(lao youtiao)になってきていると述べている。"油条"というのは中国人が朝食などに食べる棒状の油揚げのようなものであるが"老"というのは，なんども油をくぐって揚げなおしてあって古いという意味である。"老油条"という中国語の語法は少々ユーモラスであるが，その本来の意味は"海千山千のベテラン"とか"スレッカラシ"とかいうことである。最近の中国では，これに政治的意味が加えられて，"政治的消極主義者"を指すのだそうである。つまり，"整風"に際して"左""右"への偏向を指弾されることのないように，流動的な党上層のリーダーシップのもとで，工作の上でシッポをつかまれないように万事要領よくその場その場を切り抜ける幹部をいうのである。このような官僚主義的無責任性と，保身術に巧妙な行動様式が，中級以下の党員層のあいだでどの程度普

遍化しているのかはもちろんわれわれにはわからない。しかし，1962年後期の広東省党委機関紙『南方日報』や難民の言葉などによっても，1961年以来の“反五風”などの整風運動の結果として，農村幹部の工作態度には消極化の傾向が現われてきていることが指摘されているのである。これらは，人民公社調整段階における農村幹部のスケープゴートの逆作用であるとみられるのである。

今日の中共政権にとって，その政策執行を現実に担当する下層党員政策こそは，その社会主義建設と経済発展の戦略大系の中でも核心的関鍵となっていることは，すでに中共自身が，なんどとなく指摘してきていることである。しかし，幹部問題が重要であるということと，その管理が順調に進んでいるということとは別の問題である。これまで，整党，整風運動の展開過程で示された中共独特の修正の形態と方法は，確かに，中共のリーダーシップ内部の諸矛盾の動的均衡を達成する上に大きな効果をもたらしてきたことは否定できない。だが，これらのリーダーシップの自己修正運動の政治的セッテイングは革命運動の各段階において大きく変わりつつあるし，また，その修正の全体主義的な政治構造の特殊性からしても，これら中共のイデオロギー的修養環元主義という方式が限定的効果しかもちえないものであることもまた事実であった。

“幹部問題”をめぐって中共のリーダーシップは“整風”のサイクルを繰り返してきているのである(注2)。一定の政治目標に基づいて，社会の全面的転換の加速度的な実現を求める“運動政権”(Movement Regime) としての中共政権にとっては政策執行の過程で“統制されたファランクス (phalanx)”(注3) として機能する党組織の円滑な作動を追求することは永遠の課題であろう。フェインソッド (Merle Fainsod) 教授の用語をかりれば，全体主義的な“党—国家官僚制”(Party-State bureaucracies) (注4) の動態に固有な病理を解決するために，中共はコミュニズムの組織概念と構造の枠のなかで，かれらに特有の行動様式を前提とした整風運動の“いたちごっこ”を繰り返さねばならないという矛盾をもっているのである。それも，今日“老油条”化などに象徴される党組織の基層レベルにおける整風効果の「収穫逓減」化傾向という困難な状況と戦いながらである。

1964年9月，安子文（中共中央組織部長）は，「現在，全国的な規模で，期間をわけ，人数をわけて広範に深く展開されている社会主義教育運動は，わが党が権力をかちとって以来のもっとも広範なもっとも深刻な社会主義革命運動である」と述べている(注5)。要するに，1959～61年の“危機”を乗りきったとはいうものの，中共政権は成立15年にして今日最も深刻な政治的課題に直面しているのである。それは中国人の“再社会主義化”の問題である。最近の大規模な“社会主義教育運動”の実態については中共側からはほとんど公表されていないが農村の状況に関する断片的なインフォメーションから判断すると，革命は少なくとも政治思想工作の側面でも“振出し”に戻った観がある。1962年にバネット (Doak Barnett) 教授は，1961年初期の中共のリーダーシップには“夢遊病的ムード”があると指摘したことがある(注6)。今日においても，中共のトップ・リーダーシップは表面的には戦闘的イデオロギーを展開しているにもかかわらず，内政に関するリーダーシップの明確な方向づけを，まだ探り当ててはいないようにみえるのである。それはいわゆる“調整”の段階にあるからであろうか。シャーマン (Franz Schurmann) 教授は，中共は延安時期以来初めて「イデオロギーと組織の深刻なギャップ」に見舞われているとも指摘しているのである(注7)。

“三面紅旗”政策の挫折がもたらした中国内部の異常に困難な状況は，1961年1月の中共九中全会公報でその一端をうかがわせたけれども，その後アメリカ国務省の手で発表された解放軍秘密文件『工作通訊』が，この時期の実情をきわめて詳細に伝えている。最近の中共の理論の一つのきわめて特徴的な側面は，中共が“三面紅旗”という社会主義革命の“より高度な”段階に突入した以後において，皮肉にも国内における“資本主義の復活”と“修正主義の滲透”に対する異状なまでの警戒を強調し始め，社会主義社会における“階級的矛盾”と“階級闘争”の永続的存在を宣伝していることである。中国における“連続革命”の概念は，安子文の言葉を借りれば「五代，十代」，「千年万代の大事」という「白髪三千丈」をおもわせるようないかにも中国的な観念にまで拡大されているのである。このような理論的立場は，1958年4月の中共8全大会2回会議における劉少奇の報告において，しだいに明確化されて以来，昨年12月の第3期全国人民代表大会第1回会議における周恩来の「政治活動報告」公報において最も明確に示されているのは周知のところである。要するに用心深く抽象的にイデオロギーの言葉で語られていることの実質的内容は，現在，中共のリーダーシップは建国後15年にして7億の中国人をコントロールすることと，広大無辺の中国社会をその意思に基づいて転換することがいかに困難な仕事であり，リー

ダーシップの前にたちふさがる社会の深層からの"抵抗"がいかに根深いものであるかをまざまざと認識しているのである。安子文の言葉は，この変革が不可能ではないとしてもきわめて困難な長期的な課題であることを告白している。中ソ論争における中共の理論的立場は，部分的には，このような中国の政治体制に潜在する"不安定"的要因の素直な反映であるとも考えられるのである。1936年にはじまる延安時期に形成された，中共独特の行動様式を伴った党組織論，特に，その"整風"運動という独自の"老一套"(lao yitao)（いつもの方法）が三面紅旗政策の調整過程で，政治権力のテコとしての党の基層組織の機能を健全化し，中共のリーダーシップにふたたび"活力"をよみがえらせることができるか否かは，今後の事態の発展と検討にまたねばならないであろう。1962年に再版された劉少奇の古典的名著『共産党員の修養を論ず』は，以上のような文脈において考察されなければならないのである。

（注2）　この問題については，ごく初歩的にではあるが論じたことがある。拙稿「中共の政治指導と官僚主義批判の問題点」，『アジア経済』，第2巻第3号。

（注3）　Merle Fainsod, *How Russia is Ruled*, 1959, p. 184.

（注4）　Merle Fainsod, "Bureaucracy and Modernization: The Russian and Soviet Case". in *Bureaucracy and Political Development*, ed. by J. La Palambara, 1963, p. 235.

（注5）　安子文，「培養革命接班人是党的一項戦略任務」，『紅旗』17～18，1964年。

（注6）　Doak Barnett, *Communist China*, Headline Series, Foreign Policy Association, No. 153, 1962, p. 20.

（注7）　Franz Schurmann, "Economic Policy and Political Power in Communist China", *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, September 1963, p. 69.

II

『論共産党員的修養』は，周知のように，1939年7月8日に劉少奇が，延安のマルクス・レーニン学院で行なった講演である。そして，この講演は，解放社編の雑誌『解放』，第82～84期，（1939年9～10月ごろと思われる）に発表され，1942年にはその一部が整風運動の"22文件"の一つに加えられているのである。この講演は，1949年以後発表されたものにおいては，第1章緒論と第2章党員の思想意識の修養（1～5節）とからなっている。だが延安時期から1947年6月までに出版された劉少奇のこの論文をみると，1949年6月に劉少奇自身の手によって削除されたのは，第2章6節と第3章全部であることがわかる。1949年版は中国語にして全文約4万8000字であるが，削除部分は約2万8000字である。したがって，約3分の1の部分が1949年の第1次修正において削除されていることになる。1962年8月1日の第2次修正では，金思愷氏によると全文は5万字であるが削除されたのは6000字，書き加えられたのは8000字（そのうち約1000字が注である）となっている(注8)。ではここで，この論文の構成の原型を示すことにしよう。

『論共産党員的修養』――1939年7月8日在延安馬列学院演講――

(一)　緒　論

一　共産党員為什麼要有修養？

二　作馬克思，恩格斯，列寧，斯大林最好的学生

三　修養的各方面及修養的方法

四　学習馬列主義理論与党員思想意識修養的関係

(二)　党員思想意識的修養

一　要了解共産主義事業是人類史上空前偉大最艱難的事業

二　党員個人利益無条件的服従党的利益

三　党内各種錯誤思想意識之挙例

四　党内各種錯誤思想意識的来源

五　対待党内各種錯誤思想意識的態度及党内斗争

六　在政治上展開我們的思想斗争

(三)　組織上和紀律上的修養

一　党員与党及其他党員的関係

二　民主集中制之執行

三　党的上級，党的負責人如何執行民主集中制的原則

四　「願意」和「強迫」的統一

五　自由与必然

六　党的幹部政策和幹部対党的態度

七　工農幹部与知識份子幹部或者老幹部与新幹部的関係

しかし，この論文は実際には2カ所における別々の講演をまとめたものである。すなわち，第3章の「組織上和紀律上的修養」には次のような"注"がついている。「この章は劉少奇同志が華中党校でおこなった報告の記録をもとにして整理してできあがったものである。ただ，まだかれ自身による校閲を経ていないことをここに特に声明する」と記されている。この華中党校における報告がいつ行なわれたものであるかについては，日付が記されていないので，推測の域をでないのであるが，1936年

～42年の時期，中共中央北方局，中原局，華中局書記を歴任した劉少奇(注9)が，六中全会の終わったあと延安を去る前の1939年7月に“講演”を行なって以後，1941年7月に『党内闘争を論ず』を発表するまでの時期であろうと考えられる。その理由は，この報告の内容から判断して，これが同じ華中党校での講演である『党内闘争を論ず』の後に発表されたとは考えられないからである。その他参考までに劉少奇のこの前後の時期における著作活動をみると，1939年5月1日『論組織民衆的幾個基本原則』，1939年10月20日『論公開工作与秘密工作』，年代不明の華中党校における講演『民主精神与官僚主義』，1940年7月1日『作一個好的党員，建設一個好的党』，1941年『反対党内各種不良傾向』がある。

劉少奇の論文の理論的構造とその修養の展開の中国的特質については，既にシュオルツ (Benjamin Schwartz) 教授(注10)，ボアマン教授などによってすぐれた分析が加えられているので，ここに詳しく繰り返す必要はないであろう。ただこの論文の全体的構成によって，より一層明らかになったことは，ボアマン流にいえば，このとき“General planner”であった毛沢東にとって“Operations officer”としての役割をはたしていた劉少奇は，「共産党員の修養」は党員の思想意識の修養という“個人的なプロセス”であると同時に，党内の組織活動における修養という“社会的なプロセス”でもあると考えており，既に“修養”の二面的構造を統一的にとらえていたということである。この意味では，この論文はおそらく1939年代に既に共産党の党組織理論の全大系をきわめてプリミティーブな形でではあるが提示していたものであるということができるのである。

それまでの中共にとっては，文献的には大系的なまとまった形での党組織論というものはなかったようである。1921年の『中国共産党組織章程』(注11)およびソビエト革命期の『中国共産党党章』(注12)においては，党員の権利と義務，民主集中制に関する概念はきわめて簡単かつ不十分にしか規定されておらず，周恩来による党組織論の論文などあるとしても包括的な論説はないようである。1937年以後，毛沢東が若干の論文の中で，党組織論，幹部問題をとりあげ，1938年11月の中共六中全会で“党規”が通過している(劉少奇)と伝えられているが，1938年初期と推定される時期になってはじめて，中共は共産党の党組織論の集大成と目される『党的建設』を出版している(注13)。この小冊子はレーニン主義党原則論に従って書かれた党務に関する一般的教科書であり，文の調子，中国革命史に関する部分の記述から判断して“ロシア留学生派”の1人（張聞天？）がその筆者であると思われる。劉少奇も『論共産党員的修養』の中で，この『党の建設』がマルクス・レーニン学院の学習に使われたことを述べている。劉少奇のこの論文と毛沢東のこの時期における哲学的著作とは内的に深く関連していると考えられるが，『党の建設』というレーニン主義党理論の一般的学習を経て，この劉少奇の論文において中国の土着的理論が生まれるに及んで，今日の中共の党理論の基礎は形成されたということができるであろう。

この論文にはアメリカの学者が指摘するように“理論的”には確かにマルクス・レーニン主義の教義に新しくつけ加えられる“innovation”はないかもしれない。しかし，その後現実政治の領域で異状な威力を発揮した中共党員の行動様式を規定し，その行動様式の“独自性”への“第一歩”を印したという意味で，この論文の意義は積極的に評価さるべきであろう。その意義は単にこの論文の出現を必要ならしめた延安政権の当時における政治状況，党内状況とそれへの“対応”というだけの狭い視角から評価さるべきではない。それは1935年1月“遵義会議”において毛沢東路線が確立されて以来，抗日民族統一戦線という革命の戦略戦術問題と並んで，“党の建設”という革命路線のより内面的な問題つまり“党風”についても“中国の道”をゆく毛沢東路線が本格的に形成されてくる最初の徴候をここに示したものとして考えられるべきであろう。

“延安の整風運動”をはさんで，1939年から1944年までの中共は“党務”に関しても実に多くの文献を生みだしている。一々枚挙にいとまはないが，周知のものを除いて1939年前後の文献で重要なものをあげれば，李富春『中国共産党是什麽』(1938.4.12)，陳雲『支部』(1939.6.10)，羅邁『論党的組織結構与民主集中制』(1939.11.25)，陳雲『怎様做一個共産党員』(1939.5.30)，羅邁『挙起自我批判的武器』(1940. 7.10)，洛甫『党的工作中的一個基本問題—了解具体情況』(1940.1.26)，洛甫『提倡樸素与切実的工作作風』(1940.5.16)，洛甫『関於党的両種工作方式』(1940. 7.27)，王稼祥「為中国共産党的鞏固和堅強而斗争」(1939. 9.29)，李富春『関於新老幹部的問題』(1939.10.20)，洛甫『共産党員的権利与義務』(1939.9.22)，陳雲『為什麽要開除劉力功的党籍』(1939.5.30)，楊清『共産党員被捕時的処理与気節問題』(1939.10.20)，洛甫『略談党与非党員群衆的関係』(1939.11.7)，楊尚昆『華北党建設中的幾個問題』(1939.11.24)等

である。

1939年以降急激に党務に関してこのように多くの論文が発表されるに至ったのは，1941年以後に始まる整風運動との関連で検討されなければならないであろう。そしてまた，洛甫（張聞天）がこの時期に理論的にめざましく活躍していることなどは，中共リーダーシップ内部での“ロシア留学生派”の地位に関連して興味ある検討の対象となろう。

劉少奇の『論共産党員的修養』が発表されるに至った背景としてのこの時期における，延安政権が当面していた党内状況については，1942年からの整風運動の背景とほぼひとしいものと考えてよいであろう。それらの具体的状況は劉少奇の論文の中にも示されているし，「整風文献」の随処に指摘されている。周知のように，1934年10月紅軍は江西省瑞金を出発し，“2万5000里の長征”を経て，1935年10月に陝西省北部に達した。そして，1937年7月蘆溝橋事件を迎えたときには，中共党員は4万人にすぎなかったのである（1933年には30万人であった）。それが，延安政権の発展に伴い3年後の1940年には80万人に膨張しているのである。党員の急増は，まず党の幹部政策にいろいろな問題を提起せざるをえなかったのである。元来，中共の“建党運動”は必ずしも規則的に着実におこなわれているとはいわれぬ面があり，それゆえに，党員の流動性はかなり高いのではないかと推測せられる。1962年現在で中共党員は1700万人（1949年以後の入党者は80%を占める）に達しているが，農村地域における入党条件の安易さがこのような党員の爆発的増加を招いていると考えられる。これは中共の農村社会をコントロールするという要請のためには不可避的であったけれども，農村幹部問題は，これらの幹部たちの文化・思想・組織能力の水準の低さなどの諸原因によって，中共当局にとっては一貫した難問となっているのである。1962年における農民出身の党員の比重は70%である。1951年7月には華北にいる党員数は180万人であり，そのうち農民出身の党員が150万人であるから(注14)，その比重は83%ということになる。延安時期の中共党員のうちで農民の占める比重についていえば，おそらくこの数字をこえて党が“非プロレタリア”的社会構成をもっていることを顕著に示すことであろう。

劉少奇は非プロレタリア出身の新しい党員にとっては“鍛錬”と“修養”がとくに必要であることを述べて次のようにいっている。「われわれ共産党員はけっして天から降ってきたものではなくて，中国の社会の中から生まれたものであり，党員はだれもかれも，みな中国のこの汚れた社会からでてきたものである」と。このような中共における共産党員概念の非神格化――もちろん，権力との癒着の程度によって変化しつつあるが――という基本的認識は，中国革命の歴史的文化的背景から説明されなければならない。だが，延安時期そして現代においても，劉少奇，毛沢東等の文献が素直に指摘するように中国の農村社会のあらゆる要素をその性格に反映している農民の奔流のような党への加入に支えられて，広大な中国大陸の農村地域にゲリラ戦とゲリラ戦を思わせる大規模な生産運動を展開するために，しかもコミュニケーション手段の後進性という状況を前提として，その弾力性ある政策を党の“一元的指導”のもとに貫徹するということは，きわめて困難なことであったのである。延安整風で党が提起した問題は，幹部の中に存在する主観主義作風と派閥主義であった。そしてこのうち，特にリーダーシップにとって修正を要すべき偏向と目されたものは，党政下級組織における独立性強調の傾向（闘独立性）であったのである。以下に訳出した劉少奇の論文の中にもうかがわれるように，この時期の党の文献はいかにしてレーニン主義的な党の組織原則を確保するかに問題を集中している(注15)。この問題については既に多くの中共文献があるけれども，若干紹介するとすれば，1942年10月19日から43年1月14日まで開かれた西北局の『陝甘寧辺区高幹会経過及其経験的総結』，1942年11月5日高崗『整頓党政軍民各組織間関係問題』，1943年1月任弼時『関於幾個問題的意見』，1943年6月16日呉芝圃『反対不良傾向削除自私自利腐化堕落的個人主義』等がある。

1963年1月11日の『人民日報』の社説の中には次のような一節がある。「幹部自身が社会主義的自覚に欠けており，はなはだしいのは自発的な資本主義的傾向すらもっていて，どうして，まじめに党の社会主義政策を貫徹し執行することができようか？　このような幹部は人民のために服務し誠実な態度で人民の勤務員となる自覚が欠乏しているかもっていないかである。この人たちはいいかげんな気持で労働に参加しているし，そのうえ多くたべ多く一人じめにすることばかり考えている。この人たちは大衆の意見をきこうとしないばかりか強制的な命令までしている」と，農村人民公社幹部の政治的動揺と腐敗変質を批判しているのである。1962年ごろには各省で「単幹」，「包産到戸」さらには，「封建主義」の復活などが広がり，幹部の変質によって基層権力は動揺の危機にあったと伝えられているのである。これらの傾向は現

在の社会主義教育運動の整風対象である。

中国においては，劉少奇のいうように，今日もなお，マルクス・レーニン主義――毛沢東思想を学習し，革命闘争――基層工作への下放に参加することによって“完全なコミュニスト”――その党による概念化はきわめて“道具化”された人間像であるが――に変えようとする努力が続けられている。“修養”と“鍛錬”による“変身”という“観念主義”の強調は，レーニン主義と中国の儒教的伝統における君子の内面的修養の概念との結合であることは既に知られている。このような劉少奇の理論は確かに中国の精神的風土・政治的文化と調和され，延安整風を成功させ，中国革命を勝利に導く“力”を生みだす母胎となったのである。だが，われわれが見落としてはならないのは，中国の現代政治史の展開過程は，このような劉少奇理論をその中に包含しながらも，政治の世界に固有な“力”の論理に従って動いてきていることである。現代の中共の整党・整風の歴史は，けっして“修養”の歴史だけではない。中共の整党運動はソビエトのそれとは異なった柔軟な方式がとられてはいるがそのサイクルの交差するときにはやはり政治権力の厳しい強制力がきらめいているのを見逃すことはできないのである。これは1949年以来の整党運動の過程がそれをより鮮明に示している。党員の流動性の一例をみよう。1949年当時の党員は448万人であったが，この政権成立前入党者は1961年7月には340万人に減っているのである。12年間に108万人，総数の23%が党籍を失っている。これらの人々はどのようにして党を去っていったのであろうか。“長征”の“勇士”たち4万（1937年）のうち，瑞金の党員は1963年12月現在で800人足らずである。これらの事実をどう理解すべきであろうか。

中国共産党の党組織理論は基本的にレーニン主義に基づいており，行動様式の側面において中共の独自性がみられるとはいうものの，その後の事実が示すようにこの独自性はけっして理論のよって立つ政治構造そのもののもっている基本的原則をまげるものではないのである。そして，今や“延安の党風”は工業化と集団化に平行する中国における全体主義的な“党一国家官僚制”の形成という新しい状況の中で変質しつつあるのである。劉少奇が1949年6月に削除した第2章6節には次のような一節がある。すなわち，

「政治路線が誤ってしまえば，この政治路線に基づいて提出される，組織任務，闘争方式，幹部政策，同志に対する関係と態度などは必然的に正確であることはありえないのである」と。

1949年10月の新政権成立の直前，劉少奇がこの一節を削除したことは意味深い。要するに中国共産党員の“修養”とは，現実には“政治路線”の“無誤謬性”を前提として状況に対応して変質しつつある毛沢東のリーダーシップの求める方向線上においてのみ存在しうるのである。それはまた“今日”へのはじまりでもあろう。

（注8）　金思愷，「関於“論共産党員的修養”一文的重新発表」，『祖国周刊』，第40巻第7期。

（注9）　劉少奇の経歴についての研究としては，H. L. Boorman, “Liu Shao-chi: a Political Profile”, *The China Quarterly*, 10, April-June, 1962. および石川忠雄，「劉少奇をめぐる若干の問題」（石川著『中華人民共和国』に集録）が有益である。

（注10）　C. Brandt, B. Schwartz, J. K. Fairbank, *A Documentary History of Chinese Communism*, 1952の延安整風に関する項および Boorman 教授の前掲の *Asian Survey* の論文は特に有益である。

（注11）　「中共早期文件拾遺」，『今日大陸』No. 192には C. Martin Wilbur 教授が発表した陳公博の「修士論文」の付属資料の中国語訳がのっている。

（注12）　陳誠南昌行営編，『赤匪反動文件彙編』，第1冊（党務），民国24年5月，163～178ページに1931年12月蘇区中央局翻印として党章が集録されている。

（注13）　国民民党は，この小冊子を民国27年7月（1938年）にリプリントしている。「注」に，中共が最近出版したものとなっている。

（注14）　薄一波，『加強党在農村中的政治工作』，『南方日報』，1951年7月1日。

（注15）　新島淳良氏は『現代中国の革命認識』の中で「延安整風運動」について論じているが，その論点は“学風”と“文風”に終始している。これらの解説についても多くの問題があるけれども，中でも延安整風の核心的問題が“党風”の改革にあることを忘れていることは不可解である。党組織論的視点を度外視した整風の説明は“矢”を放っても“的”にとどくような分析とはなりえないだろう。この問題については後日改めて論ずる予定である。

『共産党員の修養を論ず』

以下は，第2章6節および第3章全部の部分訳である。全文を訳出することはここではできないので，文脈をたどれるように重要部分を抜すいしている。訳文はほとんど原文の忠実な邦訳であり，要旨を概括したところはない。原文は青漳に数種あるが，最も新しいのは1947年6月の華北・新華書店版であり，内容に変化はない。

㈡　党員の思想意識の修養

六　政治の上でわれわれの思想闘争を展開せよ

しかし，同志諸君！　わずかにただこれだけのこと，わずかにこれらの最も基本的なことだけではまだ不十分である。われわれはまだ思想上の鍛錬と修養の重心をその時々の政治闘争と政治路線の上に置かなければならない。なぜならば，政治闘争は階級闘争の最高形式であり，プロレタリアートの思想意識は最も完全に最も具体的にプロレタリアートのその時々の政治闘争に対してとっている立場と態度の上に表現されるものであり，その時々の政治闘争に対してとっている方針と路線の上に表現されるからである。われわれの思想意識は，抽象的なものではないし，また，とらえられないものでもなく，われわれのいろいろな事物，いろいろな問題に対する観察と言論，行動と計画，方針等々の上に現われるものであり，特に，われわれのその時々の政治闘争の中でいろいろな基本的で重大な問題に対する観察と言論行動の上に具体的に現われるものである。それ故に，われわれは，各人がその時々の政治闘争の中で，いろいろな基本的に重大な問題に対してとっている立場と態度をみて，そしてそれぞれの人のこれらの問題に対する観察，言論，行動と計画，方針等々をみれば，それぞれの人の思想のその時々における主要なものが，どのような階級の観点・嗜好，情緒と希望および利益と要求を代表しているかを知ることができるのである。それ故，われわれはプロレタリアートの代表であるか，あるいは，プチブルジョアジーとブルジョアジーの代表であるかを決定するのは，ただわれわれの主観的願望によって決定されるのではなく，だいじなのは，われわれのその時々の政治闘争の中におけるいろいろの基本的に重大な問題に対してとる立場と態度および言論，行動，計画，方針等々が，真にプロレタリアートのこれらの問題の中における希望と利益と要求を代表することができるか否かによって決定されるということである。ただ，われわれが主観的にプロレタリアートを代表することを願ったり，一個の社会主義者，共産主義者になろうと願ったりすることで，われわれは客観的にすでにプロレタリアートの代表になったり，真の社会主義者，共産主義者になったということはできないのであり，このようなことはまったく不十分である。世界には数えきれないくらいの「プロレタリアートの代表」を自称する人たちがいる。だが，今日に至るまで真にプロレタリアート解放の遠大な利益と要求を代表できるもの，真の共産主義者，マルクス・レーニン主義者は，やはりただ各国の真のボルシェビキと各国の共産党員あるのみである。なぜならば，各国の共産党員，真のボルシェビキは，「自ら称し」，「自ら口にする」プロレタリアートの代表であり，マルクス・レーニン主義者であるのみならず，かれらはプロレタリアートの長年の国際ブルジョアジーと一切の反動勢力に対決する革命闘争の中にあって，それぞれの異なった国家と異なった時期にあっていろいろの基本的に重大な政治問題に対して，プロレタリアートの立場と態度をとり，マルクス・レーニン主義の方法を運用して，これらの問題を観察し，プロレタリアートの行動の方針，路線と計画を規定し，それとともに広大な労働群衆を動員し指導し，戦闘をすすめ，偉大な革命の勝利を獲得したのである。客観的なプロレタリアートの長年の革命闘争はボルシェビキ，ただボルシェビキのみが真のマルクス主義者――レーニン主義者であり，真のプロレタリアート解放の利益の最良の代表者であることを証明しており，その他一切の「自ら称し」，「自ら口にする」社会主義者，共産主義者はすべてプロレタリアートの代表ではないことを証明しているのである。それ故に，われわれが一つの政党やある人たちがプロレタリアートの前衛であるかないか，真の共産主義者であるかないかを観察するには，かれらの宣言，決議と言論をみなければならないのみならず，まただいじなのは，かれらの政治行動，かれらの政治闘争中でとっている立場と態度，闘争中の各階級にあたえている影響がどんなものであるかによって決定されるということである。

それ故，われわれは思想上の鍛錬と修養において，まず重点的に党の正確な政治路線のために闘争しなくてはならない。マルクス主義の観点を用いてその時々の政治状況と経済状況を研究していかなくてはならないし，歴史の上から社会における各階級の相互関係と力量の対比とそれが闘争において採用している政治方針，政治任務と闘争方式等を研究しなければならない。ならびに，歴史からいろいろな政党が闘争の過程で変化していくことを研究し，共産主義運動の中のいろいろな流れ，プロレタリア政党の中のいろいろの流派と，これらの流派がプロレタリアートの革命闘争の中でいろいろの基本的に重大な問題に対してとっている立場，態度と方針，計画等々，および，多くのこれらの流派がまたいかにしてプロレタリアートに背反するようになったのかを研究しなければならない。これらの研究の中から，われわれは，将来の政局の変化の趨勢，プロレタリアートとその政党がその時々の政治生活の中でもっている地位と作用，およびわれわれがどのような正確な政治戦略と戦術を用いて闘争を進めるべきか，どのように，かつ，どこから自分の仕

事を始め，また進めていくかを予測できるのであり，それによって，革命とプロレタリアートを前進させていくことができるのである。これ以外に，われわれは，まだ積極的にその時々の政治生活と政治闘争に参加し，常に時局の変化を研究し，多種の政治思潮がその時々においてもっている反動性と誤りを暴露し，自分の政治方針と要求を宣伝し，切迫した政治的要求と経済的要求のために群衆を動員して闘争を進め，実践の中でわれわれの政治路線を検査すべきである。このほか，われわれは，まだ闘争の中で群衆を研究し，群衆の生活，習慣，情緒と要求および群衆の自覚の程度，政治経験等を理解し，それによって，適当な方式，スローガンと要求を採用して群衆を団結させ動員し，その時々の革命闘争の中に参加し，闘争の中で群衆の自覚と要求を高めるべきである。このほか，われわれはやはり闘争の中にあって群衆に向かって学習し，仔細にわたって群衆の中にある意見と要望を傾聴すべきだし，いささかもわれわれと群衆との連携を弱めてはならず，虚心に群衆の闘争における各種の新しい創造と新しい経験を研究し，その中にあるよいものは吸収し，整理して，理論的根拠をあたえ，これを一般化し，これによってわれわれの経験と知識を補足し，われわれの理論と思想を充実し発展させるべきである。これを総じて言えば，われわれはプロレタリアートの立場に立って積極的，勇敢に政治闘争と政治生活に参加しなければならず，いろいろな政治問題を注意して研究せねばならず，自分の政治問題に対する関心を高め，自分の思想を政治の上で展開させ，自分の思想を客観政局の進展，各種新事物の発生にしたがって不断に発展させ，進歩し，深化するようにしなければならない。そしてなお情勢がもし変化した場合には勇敢に責任をもつことを恐れずに，独立的に自分の政治方向を決定でき，自分の工作方針，工作方式と闘争方式を変えることができ，責任をもつことを恐れずに闘争においてすでに時期おくれで陳腐になった古いスローガンと古い決議を放棄し，新しいスローガンと新しい決議をこれに変えることができなければならない。このようにしてはじめて，われわれは自分を鍛錬し修養し一個の忠実な純潔なプロレタリアートの戦士とすることができるのみならず，自分を鍛錬し修養して一個の勇敢な進歩的な戦闘的なプロレタリアートの政治家と革命家にすることができるのである。

共産主義の事業の中にあってはいろいろな異なった人材が存在することを必要としている。共産党員はいろいろな異なった工作部門へ分散していて，いろいろな異なった工作を担当していることが必要である。しかしながら，あらゆる共産党員はすべてそれぞれ部門の中にあってはただ一個の単純な工作者であってはならず，同時にまた一個の自覚的な政治戦士つまり政治に関心を持ち，発展的であり，勇敢で，進歩的で，戦闘的なプロレタリアートの政治戦士でなければならない。こうしてこそ，かれは政治の上から自分の負担している部分の工作が全体の革命運動の中で占めている地位と作用を理解することができ，自分の工作と組織任務を政治任務の水準にまで高めることができるのであり，その時々の政治任務に服従して，はじめて，自分の工作のやり方をもっとよくすることができ，そして他の工作者と他の部門の工作を推進させることができるのである。ここでわたくしは特に次のことを指摘したい。すなわち，党の軍事部門の工作はやはり党の政治任務に服従すると同時に，党の軍事工作はまた党のその他の部門の工作の展開をおし進めるものであると。軍事工作は当面党の中心工作であるけれども，しかし，党の政治任務を軍事工作に服従させることはできないのである。

一切の工作，一切の闘争と一切の努力は，すべてプロレタリアートのその時々の革命闘争（国際的範囲と一国的範囲の）の中で提出されている政治任務に服従している。党内闘争もまた党の政治任務に服従している。それ故，われわれは，注意力を集中し，最大限の力を集中してその時々において，党とプロレタリアートが政治任務を実現するのを妨害するいろいろの思想と行動に反対しなければならないし，その時々の主要危険に反対しなければならない。それ故に，われわれは，それぞれの時期における党内の各種の誤りと欠点を並列的にみなして，平均的なもの，前後と軽重の区別のないもの，中心のないもの，雑多なものだとして党内闘争を進めているのではない。

同志諸君！われわれ共産党員は政治問題に対してまったく関心をもたないということであってはならないし，精神的にも萎縮していてはならない。このような人は，政治上においてある種の起こし易い重大な誤りを犯すことを避けることはできるかもしれないが，しかし，絶体に一個のよい共産党員になることはできない。よい共産党員とは，一面ではかれは基本的に忠誠純潔であり，断固として人民の公敵に反対し，克己して公のために働き，懸命に努力し，紀律を遵守するものであらねばならぬし，非常によい共産主義の道徳をもったプロレタリアートの戦士でなければならない。同時にかれは，また，

積極的で勇敢で，前進的，戦闘的で，政治的に発展的で，各種の変化と複雑な環境のもとにあっても行動は機敏で自己の方向を見失わず，創造的に活動でき，現実の発展の法則性に影響をあたえる能力を有するプロレタリアートの前衛でなければならない。このような共産党員だけが品格と素質ともにすぐれた共産党員となることができるのであり，プロレタリアートの隊伍の中での傑出した人物となることができるのである。

われわれは，ある党員諸君がもしも政治上において誤った路線を採用したとするならば，その党員が組織路線上と，思想闘争上において誤りを犯さなくてすみ，組織任務を正確に提出することができ，思想闘争を正確におし進めることができ，組織方式，闘争方式等を正確に決定することができるなどと想像することはできない。このようなことはありえないことである。政治路線が誤ってしまえば，この政治路線に基づいて提出される組織任務，闘争方式，幹部政策，同志に対するところの関係と態度等は，必然的に正確であることはありえないのである。それ故，われわれはまず，政治上において誤りを犯さないよう，とりわけ路線上の誤りを犯さないように注意しなければならない。それ故，われわれ党員は断固として党の正確な政治路線の上にたって闘争をおしすすめ，各種の革命的実践に参加しなければならない。そうしてこそ，党員は思想意識の上にあって自分を鍛錬することができ，各種の非プロレタリア的な不正確な思想意識をとり除くことができるのである。同じように，われわれはまた，もしもある党員たちの思想意識の中に各種の非プロレタリア的で，搾取階級的な思想がしみこんでいるならば，かれらは政治上，原則上，完全に誤りを犯さなくてすませることができ，真理を透徹してみとおすことができ，真理を擁護することができるなどということは想像することはできない。このようなこともまたありえないことである。かれらが基本的に，プロレタリアートの立場に立っておらず，あるいはまた，断固としたプロレタリアートの立場に立っておらず，プロレタリアート解放の遠大な利益から出発しないで，政治的任務と組織的任務を提出し，闘争の目標，闘争の方式等を決定するならば，かれらは誤りを犯さなければならないのは避けることのできないことである。それ故，われわれは思想意識の上において修養を進めなければならないし，自分の断固としたプロレタリアートの立場を確定しなければならない（政治上，組織上において犯した誤りはまだ認識論上の根源があるけれども）。こうして後，はじめてわれわれは自覚的に，断固として保留することなどなくして党の正確な政治路線の上に立って闘争を進め，人民の公敵に反対し，また，闘争の中にあって党のこの正確な路線を発揚し充実することができるのである。このような党員であってのみ，かれははじめて，プロレタリアートと共産主義の事業に忠実であるのみならず，かれは党の闘争の中にあって，不断に正確に自己を発展させ，党内の活動的，積極的要素となり新鮮な血液となり，われわれの党を前進させることができるのである。

同志諸君！　思想意識の上で修養についてはこの辺でやめに致します。

㈡　組織の上と紀律の上で修養

一　党員と党および他の党員との関係

党員の組織の上で修養は党員個人と党との関係および党員個人と他の党員との関係を反映している。党員はどのような立場，方式と態度をとって党とその他の党員に対すべきであるか――これはすなわち党員の組織の上での修養である。われわれはまず党の組織機構から説明しよう。

A　党は矛盾の機構である

党の組織機構とはどのようなものであるか。これは他の事物と同じように矛盾の機構であり，矛盾の統一体である。すなわち，二つの相反するものが一つに結合して一つの新しい物と存在になっているのである。自然科学はわれわれにつぎのように教えている。世界のあらゆる物体はこのようにして結合してできていると。1人の男に1人の女を加えれば夫婦関係ができる。一切のものはすべて矛盾の統一体でなければならない。

われわれの共産党はまた，それぞれ違った党員によって結合されて成り立っているもので，その基本的機構は支部である。たとえばわれわれの党員3人以上で1個の支部あるいは小組を組織することができる。しかし，支部あるいは小組はたんに一個の党員に2人の党員を加えた関係にすぎないのではない。1人の党員に2人の党員を加えれば3人の党員となる――これはたんに一つの加え算の関係にすぎず，まだ党の機構（組織）になったとはいえない。どのようにしたら組織になることができるのであろうか。すなわち，3人の党員の中で，1人の支部書記と2人の支部成員がいなければならない。支部書記と支部成員の結合はすべて矛盾を含んだ結合であり，すなわち，指導する者と指導されるものとの結合である。このようにして一個の統一的組織となるのであり，この

ような統一的組織があってはじめて力をもつのである。このような統一的組織がすなわち党であり――このようなものが党の基本組織機構である。

全体の党の結合形式とは党の各級指導機関と全部の党員の結合であり，党の中央から党の各部分，各機関およびそれぞれの支部までの結合であり，党の指導者(領袖)，党の幹部と全体党員大衆との結合であり，党の上級組織と下級組織の結合である。したがって，われわれの党の機構は混合物ではなく，幾十万党員の簡単な総合でもなく，また一定の機構をもたないものでもなく，一定の組織形成と一定の規則とに従って結合しているものである。

党は連合会ではないし，それぞれの地方党部の連合組織でもなく，違った党員，違った組織部門が結合してできあがった一個の集体的な全体である。この集団組織と連合組織は異なったものである。

党の具体的結合形式はすなわち民主集中制である。このような結合形式の最も具体的な表現は，党規約の支部に関する規定である。どのようにすれば党の統一の目的を達成し，党員を一つの統一体に結合できるのであろうか。党の統一の内容と実質はマルクス主義がつくりだす思想の上の一致であり，このような思想上の一致が最も基本的なものである。それ故党内にもしも思想上，原則上の分岐があるならば，必ず闘争を行ない，一致を新たに獲得しなければならない。もしも，誤った思想と誤った原則を固持するものが党内の大多数であるならば，最後にはかれらと分裂することは避けられないのである。別に一つの組織を成立させるのである（たとえば，レーニンが社会民主党を脱退して，別に共産党を組織したように)。

党員の思想上における一致から，組織上，行動上と紀律上での一致がつくりだされる。これが党の統一の具体形式である。もしも，組織の上で，紀律の上で，行動の上で一致がなければ，思想上の一致も表現する方法がないのである。それ故，民主集中制はまた，党の組織の上，思想の上の統一を保証する具体的形式である。

民主集中制の原則とは，少数が多数に服従し，個人が組織に服従し，下級が上級に服従し，全党が中央に服従することである。これらの原則の上での規定以外に，紀律の上での約束を加えなければならない。すなわち，あらゆる党員はすべて組織原則に従って仕事をせねばならず，これらの原則に違反したときは紀律の制裁を受けねばならないのである。これらの基本的組織原則を認識したあとではじめて，さらに一歩進んで党員の組織上における修養について語ることができるのである。

B　党員と党の関係，党員と他の党員の関係はどのように確定すべきであるか

党員が党に対するところの関係は，一つ一つの分子(個体）と全体との関係である。ちょうど細胞と人体の関係と同じである。だが人体を用いてわれわれの党を比喩することはあまり適切ではないところもある。なぜならば第1に，人の頭脳は他人に切り取られてしまったならばふたたび第2の頭ははえてこないからだ。しかし，もしも党の中央の責任者がすべて敵に逮捕されたとしても，われわれの党を消滅させることなどできはしない。一つの中央委員会が破壊されても，また別の一つの中央委員会が生まれてくるからだ。第2には，一つの細胞は人体の中でもっている作用は一つの細胞以上の作用を超過して働くことはできない。しかし，1人の積極的に努力する党員は，ただたんに1人分の工作をするだけではなくかれは全体の党を前進させることすらでき，多くの党員をすべて前進させることすらできるのである。それ故，あらゆる党員は党内の積極的，活動的な要素とならなければならず，積極的，推進的な作用を果たさなければならない。そして消極的作用を果たしてはならない。

しかし，同時に知っておかなければならないことは，その党員が能力と作用とにおいていかに大であっても，かれはたんなる多数の中の1人にすぎぬのであり，レーニン党というこの矛盾した機構の中の一分子であり，党の中に立って指導し，全体の党を推進しなければならないということであり，党外や党の頭上から党を指導してはならない（レーニン，スターリンはすべてこのようであった)。

党員と党の関係とは具体的にいえば，上級と下級の関係であり，中央との，支部書記との，小組長との関係である。あなたがもし1人のよい党員となろうとするならば，あなたが1人の普通の党員，小組長，支部書記，中央委員であるそのときに，みな非常に立派に仕事をしなければならないのである。

1人のよい人になるということはできないことではないし，また1人のよい党員になるということもできないことではない。党内には指導する人と指導される人がいる。しかし，かれがそのどちらであっても，すべては党員の中の一人である。あらゆる党員は，かれの党内での具体的地位と他の党員，党の指導機関あるいは指導者によって建てられた正確な関係に従わなければならない。

このような関係は民主集中制の原則に基づいて建てら

れたものである。党内に党の組織の支配を受けないような人はだれもいないのに，もしも，指導者が党の支配を受けず，党員の支配を受けず，党を支配しようとするならば，その人は指導者になることはできない。しかし，党には必ず指導者がいなければならない。なぜならこうしてはじめて一個の組織をもった全体となることができるからである。党の上級は下級が決定するのであり，下級はまた，上級に服従しなければならない。これがすなわち，民主集中制の規定する矛盾の統一である。したがって党員は，自分のいる地位に基づいて上下左右に対する関係を確定し，党内の団結を達成しなければならない。このような修養がいわゆる党員の組織上における修養である。

民主と集中――これは二つの矛盾した概念である。しかし，この語句の上，概念の上での矛盾はまさに客観的事実の上での矛盾を反映している。党が矛盾の機構であることを反映しているのである。党の民主集中制は党員と党，下級対上級，上級対下級の矛盾の関係を反映している。「民主は手段であり，集中が目的である」――このような言い方は誤りである。なぜなら，そのような言い方は民主と集中の関係，民主と集中の矛盾の結合を説明できないし，党の目的が団結と統一であり，戦闘力を強化することであり，全体の民主集中制が統一というこの目的を達成する道であることを説明できないからである。民主だけあっても，あるいは集中だけあっても，統一と団結を達成することはできない。統一とはたんなる集中ではなく民主的集中である。民主がなければ集中もないと同時に，集中がなければまた，真の統一もありえない。

党員は党内にあって，中央委員，省委書記，あるいは支部書記であるとを問はず，かれはかならずほかの人と関係を生ずるし，ここで上級下級の関係を発生するのである。下級は上級に対して服従しなければならない。しかし，同時にまた，上級を監督しなければならない（あらゆる党の領袖，党の指導者はすべて党員の監督を受けなければならないし，同時にいかなる党員もすべて別の人を監督する権利がある）。もしも，上級が弱ければ，やはりそれを援助する必要があり，これもまた矛盾である。上級にあるものは下級を指揮し，下級の意見をきき，民主を実行し，どんなことが起こっても人々と相談し討論しなければならない。下級が誤っていれば，やはりそれを是正しなければならない。自分の左右と平行関係にある同級組織に対しては，相互尊重，相互援助，相互観察，相互競争をすべきだし，同級が誤りを犯したならば，上級に対して意見を提出すべきである。これを要約していえば，あらゆる党員は，党の立場に立って，現在の地位を利用して，積極的作用を起こして自分と他の党員，上級下級に対する関係を処理すべきであり，適当な方式を採用して党内闘争を展開すべきである。以上が党員の組織上における修養の基本的出発点である。

二　民主集中制の執行

A　集団指導と民主集中制

既に述べたように，党の組織機構の具体形式は民主集中制であり，党内には指導するものと指導されるものがある。しかし，党の指導とは集団的指導であり個人の指導ではない。したがって，必ず民主がなければならぬし，それあってはじめて集団的指導が実現されうるのである。なぜならば集団指導とは全党の経験と智力を集合し，全党の最もよい意見と計画を集めて一つの決議案，一つの方針とすることであるからである。いかなる党員もすべてかれの意見を提出する機会をもっており，こうして党の集団指導に参加し，全党に対する，革命に対する指導に参加する機会をもっているのである。

同時に，指導とは多面的，具体的なものである。したがって，党の指導とは一般的な戦略・策略の確定以外に属するそのほかのすべての指導はすべて具体的である。各部分の具体的工作の指導にはそれぞれそれ自体の法則性がある。だから，いろいろな方面の具体的な指導者が必要なのであり，具体的な指導のもとでの個人責任制が必要なのである。しかしもちろん，いろいろな方面の具体的な指導は総合的な集団指導の一部であり，一般性をもっているので，集団指導と個人の責任は統一的なものである。

われわれの党の戦略と策略の方針はすでに確定している。これは全党同志の皆さんがマルクス・レーニン主義の基本原則に基づいて，具体的に中国の社会を研究して得られたところの共同の結論である。これはマルクス・レーニン主義の原理を中国において具体的に運用したものである（しかし，もしもまだ新しい意見をもっている人があるならば，もとどうりその意見を提出してもよろしい）。これもまた党の集団指導の根拠である。

B　党内の民主集中制に対する誤った認識

民主集中制の基本原則を理解することは容易であるが，これを実践の中で実行することは別のことである。われわれの経験と教訓にしたがえば実際には非常に多くの人々が民主集中制を理解していないことは明らかであ

る。なぜならば民主集中制の多くの基本原則は絶対的，無条件的なものであるからである。しかしながら非常に多くの人々はこれを相対的，条件的なものだと思っている。

わたくしの知っているかぎりでは，この人々が提出する条件というのはつぎのようなものである。

第一の種類は，多数，上級，中央が原則の上でまたは政治の上で正確であるか否かを服従の条件とするものである。しかし，正しい認識は，意見の相違がある場合でも党を分裂させてはならず，党を離れてはならず，あくまでも党の決定に服従しなければならないということである。万一，真理が少数者の側にあるときでも，少数者は多数に服従し，真理でないものに服従し，組織の上，行動の上の一致を守るだけである。しかし，原則上ではやはり自分の意見を保留し堅持しており，また実践工作の中にあっては人々に次のように告げるのである。「大多数が誤っていても，わたしはやはり諸君に服従する。しかし，諸君の方法に基づいて仕事をするのは誤っているし失敗しなければならないものであることを声明しなければならない」と。これが組織の上で大多数に服従するということである。意見の相違は一定の組織的手続きに従って長期的に解決すべきである。

第2の種類は，仕事の能力の大小をもって服従の条件とするのである，このような人々は次のようにいいます。つまり，われわれは組織に服従してもよいし，上級に服従もする。ただし，上級は必ず能力の大きい人でなければならぬし，上級は腕前があり，話がうまく，文化程度が高くなければならないと。

しかしながら，幹部の能力の大小は本質的には闘争の中で現われるものであるし，このような考え方はまったく不正確である。なぜなら，その人は組織を代表しており，また，わが党の指導は集団指導であるから，各人は誠心誠意その責任者を助け，指導機関を援助しなければならないのである。こうして，諸君は指導に参加する。党員は互助の精神を持たねばならないのである。

党内には英雄主義の存在を許さない。今日われわれは個人に服従しているのではなく，組織に服従しているのである。今日党内のそれぞれの党員の地位は封神榜（神の配置を示すもの—訳注）のように，その配置がすべて非常に適切であるということはできない。しかも幹部の欠乏という条件の下にあっては，またこのほかの方法もないのである。

第3の種類は責任者の資格を服従の条件とするのである。党歴が短く，資格が低く，党内で高い名声がなければその人に服従しない。大学生は中学生に服従せず，老党員は新党員に服従しない。これもまた個人に服従することで党の組織に服従することではない。資格について競争することは誤りで，仕事で競争すべきである。党員はときには非党幹部にすら服従しなければならない。

第4の種類は，責任者の組織上の地位の高低を服従の条件とすることである。上級の党部が派出した同志は下級の責任者に服従しない。もちろん，上級党部が派出した人は特殊の権力を持っているし，指示を与えることもできるし，下級党部の工作を改造することすらできる。しかし，一般的にいえば，上級の党責任者が下級党部に参加したならば，下級党部に服従しなければならないのである。県委が支部に派遣した同志は，支部の範囲内のことがらについては支部の決定に服従すべきである。いかなる党の領袖も党の組織内にあっては，党内の大多数に服従し，民主集中制に服従するという条件のもとにあって，その人個人の指導を実行しなければならない。われわれの党内では個人の特権というものはない。毛沢東同志は全党の指導者であるが，かれはまた党に服従するものである。

第5の種類は，ある種の人は指導者の態度の好悪，自分と仲のよい友人であるか否か，かつて自分と紛糾を生じたことがあるか否か，意気投合できるか否かを服従の条件としている。これらはすべて誤っている。すべて党の指導を破壊するものである。われわれはけっして態度と感情を服従の条件とすることはできない。原則の把握がよく，ものごとの処理がよければ，その人の態度がよくないのを恐れる必要はない。われわれは党に服従し，中央に服従し，真理に服従しているので，個人に服従しているのではない。どんな個人でもすべてわれわれが服従するには値しないのである。マルクス，レーニン，毛沢東がものごとの処理がよく，かれらが真理を代表しているからこそ，われわれはかれに服従しているのである。

要するに，一切の条件的服従はすべて誤っており，無条件的絶対的服従であるべきである。民主集中制の組織原則を徹底的に執行しなければならない。

C　二種類の例外情況と敏捷な命令の執行

組織上の絶対服従も以下の二種の情況においては例外的に処理すべきである。

(イ)　上級の責任者に反党行為があることが発見されたとき（たとえば張国濤の反党）——党員はそれに反対し，中央を擁護すべきである。

(ロ) 上級組織あるいは責任者が反党またはスパイ行為があることが発見されたときは（必ず証拠がなければならないが），責任をもって党中央に向け控訴し，中央が解決するのを待たねばならないし，同時に自分は警戒心を高めなければならない。

上級は党の指示と方針を執行し，その指導に服従するには，敏捷であるべきであって，機械的であってはならない。具体的情況に基づいて決定すべきである。もしも情況が変化すれば方針を変えなければならないことすらある。下級は能動性と自主性がなければならず，敏捷に運用し，敏捷に上級の指示を執行しなければならない。これこそ最良の服従である。

三　党の上級，党の責任者はいかに民主集中制の原則を執行するか

A　指導者の責任

確かに，党の指導とは集団的なものである。しかし，大ざっぱに少し話をすれば，それで皆の集団指導が終わったというものではない。やはり1人か幾人かの人が直接に指導の責任を負担しなければならないのである。指導者の責任とは以下のようなものである。

第1，その場の具体情況，自分の負担している一部分の仕事の情況，およびこの一部分の仕事とその他の各部分の仕事との関係を詳しく知らなければならない。

第2，党の戦略戦術上の任務，方針と路線を詳しく知らなければならない。そして，党と自分が負担している工作部門の中で実行しなければならない。

第3，時間と情況を適切に見積もり，中心の一環をしっかりとつかみ，任務を提出し，計画を定め，そして前途——もし任務が完成すれば，前途はどうであるか，失敗したならまた前途がどうであるか——を指し示す。

第4，幹部を団結させ，幹部を教育し，幹部を配備させることができなければならない。まず幹部に情況，工作方針および工作の前途を理解させる。すなわち，まず幹部にどのようにするかを理解させ，その後適切に幹部を配備しなければならないのである。これこそ，毛沢東同志がいっているところの「出主意」（一定の考えをもって）で幹部を用いるということであり，指導者の責任とはつまりこのことである。

第5，検査し，督促し，経験をうけいれ，幹部と大衆の意見をきき欠点を改正し，計画を修正しなければならぬ。

第6，情況の変化をしっかりととらえ，仕事の進展をしっかりとらえ，適時に，組織と闘争方式を変化させ，新たに工作計画をつくり，新たに幹部を配備するのである。

B　指導者の具備すべき条件

この標準に基づいてわれわれの指導者を検査すると，相当数のものはその標準に達しているけれども，また，大部分のものは標準に達していないのである。この標準に達しうるためには，以下のいくつかの条件を備えなければならない。

第1，客観的で深刻な調査研究を必ずしなければならない。調査をせず，研究をおこなわなければ，情況を理解できないし，その地域の情況を理解できないし，かれのこの部分的工作と他の部分の工作との関係，およびかれのこの部分の工作が全部の工作の中で占めている位置を理解することはできない。

第2，党の戦略と策略，党の方針と路線を必ず理解しなければならないし，これをその地域の情況と結びつけなければならない。そして，この結合は客観的であり非主観的でなければならない。すなわち，自分の一部分の工作の中で党の路線を執行するのである。

第3，社会発展と革命運動の法則性についての知識を必ず備えていなければならない。これらの知識で主要なものは実践の中で会得されるものである。しかし，書物の研究ももちろん必要であるし，それに正確な方法，つまり，マルクス・レーニン主義の知識と方法——弁証法を備えていなければならない。

第4，自分を完全に党の立場の上に立たせすべての幹部の模範となり，原則上で幹部を説得し，幹部を団結させ，幹部をよく知り，幹部がわれわれのところから援助をうけ，方針をさずけられるようにしなければならない。

第5，責任を負うことを恐れない精神を備えなければならず，責任をとることを恐れず問題を解決し，責任を負い，責任を負うことを恐れずに任務を提出し，計画を立てなければならない。工作にはきもっ玉と気力がなければならない。「一定の考えをもって幹部を用いよ」（毛沢東の言葉）ということが，以上述べたことのすべてを包括している。

C　いかに幹部を団結させるか

幹部を団結させるにあたって，中国民族の伝統，中国歴史発展の特殊性はすべてわれわれが注意せざるをえないものである。党の指導者は，幹部に対して兇悪であったり，皮肉をいったり，薄情であったりすることはできない。これはすべてよくないことである。すべて，幹部の団結を破壊するものである。幹部に対しては寛大であ

るべきであり，幹部を助け，妨げてはならず，幹部に対する態度はよくなければならないし，各種各様の人材をうけいれることができなければならない。

D　党の指導者が幹部を団結させるのには以下の諸点に注意すべきである

(イ)　指導者自身は各方面において模範となり，幹部の模範となる。つまり，立場は正確でなければならないし，学習と仕事は進歩しなければならず，行動は正道をゆかねばならない。

(ロ)　指導者は原則の上で，思想の上で幹部と一致していなければならない。しかし，理論の上で，また認識の上で，工作の上では，幹部を上回っていなければならず，かれらと比べてより有能でなければならない。

(ハ)　幹部を援助しなければならないし，かれらの仕事を妨げてはならず，一切の仕事を自分で引き受けてはならず，思いきって幹部に仕事をさせなければならない。

(ニ)　幹部を愛護し，その長所を用いてその欠点を是正し（かれらが過ちを改めるのをたすけ）なければならない。態度は真心をもち，こだわらぬものでなければならず，かれらを尊重しなければならない。

(ホ)　党の指導者，党の上級は，党内の団結と統一を達成するためには，民主集中制の以下の各原則を執行するのに特別の注意を払うべきである。

第1，党の指導者，あるいは党の上級は自らまず大多数に服従しなければならぬ。多数委員と多数党員に服従するのである。

第2，指導機関は合法的に，生まれるべきである。あるいは民主的選挙を通じて上級の批准を経て，あるいは直接に上級が指定して委任するのである。指導機関は所属の党員に向かって定期の報告をなすべきであり，皆の審査を受けるべきである。

第3に，党内において自己批判と討論を発揚させ，指導機関の仕事を批判することを発揚させることに注意しなければならない。

第4に，下級組織を尊重し，党員個人の権利と職権を尊重しなければならぬ。

第5，原則の上で説得工作を多くするには，同志に対する態度と方式はよくなければならないし，同志の意見を虚心にきき，同志の意見を尊重しなければならない。

E　責任者が民主集中制の原則に違反するいくつかの表現

党内で各級の指導者の中で相当数の人々が上述の民主集中制の諸原則を執行できないし，また，反対に誤って執行してしまっている。それは以下の誤った傾向である。

第1種に属する人は，決議に服従し，多数に服従するということは，指導機関と党の責任者に対しては除外されていると考えている。かれらは決議とは自分自身が書いたものであり，紀律や条規は自分自身が制定したものであると思っている。それだから，自分は他人よりも一級高く，自分は服従しなくてもよく，執行し服従すべきなのは下級であり，普通党員であり，党の指導機関，党の責任者は除外されてよいのであると考えるのである。これは特権階級の思想であり，民主精神に違反している。わが党の内部ではどのような人物であってもみな特殊的地位を要求することはできない。

第2種に属する人物は，それぞれの党委員会の指導者（たとえば書記）がもしある一つの問題の討論の中で多数意見に同意しない場合は，この党委員会の大多数に服従しなくてもよく，自分で独断専行してもよいと思っている。これは民主集中制の原則に違反している。

第3種に属する人物は，下級党員大衆に指導機関の決議を討論させず，皆に発言させず，意見を述べさせないし，下級が指導機関を批判することを許さない。

第4種の人物は，下級に上級の威信を高めさせることを要求し，上級自身は下級の威信を高めようとはしないし，下級を尊重しない。そして，具体的仕事の中で過度に下級に干渉し，下級が自己の威信をうち建てることができなくさせ，仕事を進められなくしている。

第5種の人物は，党がかれに責任ある地位をあたえ，かれに指導の権利をあたえることを要求し，あるいはかれに指導者を自称させることを要求している。これも完全に誤った観点である。革命の隊伍の中の指導者とは，大衆闘争の中で，革命運動の中で鍛錬され，創造されるものである。現在，われわれの多くの指導者はまだ法律上の指導者にすぎず，いまだ，真の民衆の指導者になってはいないのである。

最後に，態度がよくなく，忍耐心がなく，多くの方式を用いていろいろの違った幹部に応対せず，常に幹部の不満を引き起こしている若干の指導者がいる。

F　以下の情況と条件のもとにおいては，党員が規律を守る精神があるかないかが最もよくわかる

第1，指導者が政治上，文化上，能力上，資格上においてすべてあなたに及ばないとき，あなたはその人に服従すべきだし，また，その人を助けるべきである。

第2，指導者が，または多数の党委が誤りを生じたとき，あなたはやはりそれに服従し，多数に服従し，並び

に自分の意見を留保し上級に対して異議を提出できる。

第3，あなたが上級と原則上の分岐があり，意見の上での論争があるときは，あなたはやはり組織に服従でき，上級を尊重できる。党内に各種の厳重な思想闘争が発生し，各種の誤った思想をもってあなたを誘惑するとき，あなたは，正道を堅持でき，それらと同化しない。

第4，あなたが，かつてあなたに反対したことがあり，あなたに対して私怨をもっている同志と一緒にいるとき，困難と危険にみまわれているときにあって，かれを保護し，援助し，「以徳報怨」を実行できる。

第5，あなたが最も困難な，最も危険なとき，さらには自分の生命を脅威にさらされているときでも，厳格に紀律を守ることができる。それこそよい党員である。

G　以下の情況と条件のもとでは，あなたが正確な指導を発揮できることをもっともよく証明できる

第1，大多数が政治原則の上ですべて誤っており，あなたが原則を堅持でき，また，大多数を説得し訂正させることができるとき。

第2，あなたが一つの新しい工作地区にいったが，下級があなたに対して信頼がなく，あなたが指導の上で，工作の中で，闘争の中で自分の威信を打ち建て，かれらの信頼を獲得したとき。

第3，下級とその他の同志があなたを批判し，あなたに反対したとき（かれらが正確であると否とを問わず），あなたがかれらを理解でき尊重できる。

第4，あなたの所在地のその部分の党組織が散漫であり紀律が弛緩しているとき，あなたは組織を整理し，規律と秩序を樹立できる。

第5，あなたの指導下にとても軽薄でうるさい人物がおり，あなたがその人物を指導して仕事をさせるとき，ある不服従の人物に対して，あなたがその人を指導する方策をもち，その人たちを説得し教育できる。

第6，あなたの指導下のその部門の工作の中で不真面目に仕事をする人がいない。

H　指導をおこなうについてのいくつかの模範例

この部分では，1871年パリ・コミューンにおけるマルクスの態度，レーニンが党内において少数派となった時期の態度，劉少奇自身が中共成立の初期において労働運動を指導していた際，ストライキの是非問題でとった態度を引用して，民主集中制の原則が説明されているが省略する。

四　「希望」と「強制」の統一

希望と強制とは矛盾したものであるが，また同時にそれは統一されたものである。希望は強制であり，強制は希望である。わが党内においては，この問題に対して明確でないために，しばしば多くの紛糾が発生している。同志の仕事を配分するときには，党の組織部分の指導者はこれらの問題に注意しなければならない。あるときは幹部自身がしたくなくても，客観的には非常に必要である仕事であることもあろう。党が仕事を分配するには，しばしばその党員本人が希望するか否かをだけ考えることができず，いくらかの強制を伴わなければならない。

先進的な党員は仕事を配分するときに当たっては，希望するか否か，うれしいか否かということを問題としない。仕事は客観的要求に従って決定すべきであって，主観的な願望と興味から決定することはできない。「仕事が重要であるか否か」を言うべきであって，自分が希望するか否かを言うべきではない。およそ革命にとって必要であり，重要である仕事は，自らがそれをしにゆく必要があるならば，自らそれをなしにゆくべきであり，かつまた一生懸命にそれをなすべきである。希望と強制とは矛盾の中にも同一性をもっているもの（相反相成）であり，矛盾の統一である。希望と強制は自覚の基礎の上に統一されるものである。自覚がなければ強制となるのである。党員の自覚性が高ければ，仕事に対する意欲も生まれ，強制的要素は減少する。仕事も容易に展開するし，仕上げることも容易である。要するに，党の仕事は広範な党員の自覚性の基礎の上にうち建てなければならない。

五　自由と必然

人によっては党の紀律を恐れ，党内にはいって不自由となることを恐れ，それ故党に参加しない。既に党にはいっている同志の中でもある人たちは，党がかれらに自由を与えることを要求している。これらはすべてプチブル的，主観的な自由の愛好である。このような自由とは実際上は実現することのできないものであり，客観上においては自由であることのできないものである。エンゲルスは言っている。「自由とは必然性に対する認識である」と。主観的自由とは存在しないのである。客観的法則に従って行動してこそ自由があるのであって，そうでなければ自由ではない。われわれ共産党員は唯物弁証法を把握しているので，必然性を認識することができる。より多くの必然性を認識すればより多くの自由をもつことになるのである。われわれは社会発展の法則性と必然性に依拠して革命を行なっているのであるから自由である。毛沢東同志の『論持久戦』は長期抗戦の必然性とその法則を把握しており，われわれはこの法則を理解でき，

かつまたこの法則に従って行なっている。それ故に自由である。われわれ革命者は必然的に実現しうる可能性に対しては，努力してこれをなさなければならないし，実現できない可能性に対しては，これをなしてはならない。革命運動は必然性を有するものである。しかし，主観的能動性を否定することはできない。主観的能動性は歴史発展の客観的法則性を変えることはできないけれども，しかし，主観的努力は革命の成功を早めることができ，革命の過程を短縮し，革命闘争の中における犠牲を減少することができる。それ故，主観的能動性もまた非常に必要なものである。

六　党の幹部政策と幹部の党に対する態度

陳雲同志はかつて延安で党の幹部政策について報告を行なった（陳雲，『怎樣做一個共産党員』，1939年5月30日を指すと思われる――訳注）。これは非常によい講話であるので，わたくしは（これ以上は――訳注）ここでは詳しくは述べない。しかし，この報告を聞いた同志のうちのあるものは，仕事の配分のときに，もうあてつけがましく幹部政策に口実を設けて組織の配分に服従しないものがある。これは完全に，多くの同志が幹部政策に対して誤った理解をしており，党の幹部政策を誤解して，幹部の党に対する政策としていることからうまれている。これは完全に一面的機械的理解である。

党の幹部に対する政策とは，党は本質的に幹部を理解しなければならず，幹部を愛護し，適切に幹部を配分し，辛抱強く幹部を助け，幹部に対しては真心をもって隠しだてせず，常に幹部の意見をきかねばならないということである。これは党の幹部に対する政策であり，また一面である。そこで別の一面とは，党員，幹部がどのように党に対さねばならないか，党に対する態度はどうであらねばならないかということであり，これも非常に重要なことである。ある同志が幹部を管理するとき，指導者となって幹部に対するとき，あるいはまた反対に，かれが党に対するとき，上級に対するときにおいては，この幹部政策を逆転させてはならない。自分の党内における地位と上下級に対する関係を忘れてはならない。あなたが上級であり，幹部を管理するときには，幹部の意見を多く求め，幹部政策の執行によく注意しなければならない。あなたが下級であり，党が配分をおこなうときには値ぶみしたりせず，よく服従し，配分に任せるべきである。このようにしてこそ党内の上級と下級は統一され，幹部政策は正確に執行されるのである。

七　工農幹部と知識分子幹部，あるいは老幹部と新幹部の関係の問題

革命と党の利益のために，工農幹部と知識分子幹部が密接に団結することを要求する。相互に磨擦を起こさず，相互に疎遠とならず，新幹部と老幹部を相互に助け合わさせなければならず，「工農幹部を知識分子化させ，知識分子幹部を工農群衆化」させなければならない。これは党中央のスローガンである。工農幹部は長期の革命闘争の試錬を経ており，豊富な実際経験をもっている。しかし，文化水準が低く，遠大なことがらが見えないし，常に狭隘な経験論を発生しやすい。知識分子は文化程度が高く情熱的であり，活気にあふれており，遠大な事柄を見わたすことができる。しかし実際の経験が不足しており，厳重な革命闘争の試錬を経ていない。それはかれらの大多数がすべてプチブルジョアジーの出身であり，主観的な誇大性をもっており，しばしば実践の意義についての評価が不足しているからである。工農幹部と知識分子幹部を統一させ，互助に援助させ，双方の弱点を互いに理解させ，互いに是正して，長所は互いに学習するべきである。知識分子は工農幹部の文化の低いことを軽視することはできず，工農幹部は知識分子の経験のないことや，空語の多いことを軽視すべきではない。

最後に，わたくしは同志諸君にいくつかのことを告げたい。党内にあっては，およそ誠実で素直な真面目な人物は，最後にあたって必ずや失敗することはありえない。共産党員は苦しみを前に楽しみを後にすべきである。これはまた，堯舜の「天下の憂に先んじて憂え，天下の楽しみに後れて楽しむ」の精神である。多くの人々は軽薄でいうことをきかず，不真面目で，もっぱらうまく立回ることを考えている。手が非常に長く，どんなことでもみなかき乱すことができ，至る所で面子をえようとし，うまい汁を吸う。このような人は最後には検挙されねばならないし，損をしなければならない。そのような場面に至っても懸命に働く人はすべて誠実な人物であり，現在少々損をしても最後には成功するものである。人々は必ずあなたがよい同志であることを知るのである。われわれの党員はよいことを学ばねばならず，悪いことを学んではならない。

すべての党員は上述のことに照して修養し1人の正統派の人物となり，党内において積極的作用を果たさなければならない。このようにして，党は団結し統一できるのであり一つのよい党を建設でき，革命の勝利を保障できるのである。

（調査研究部東アジア調査室　徳田教之）